

燈虎

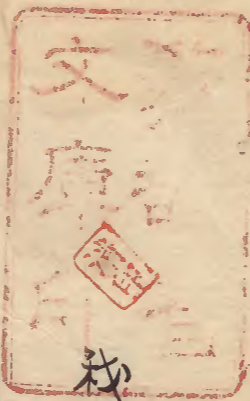
五十六

大 政 官 文 庫			和 書 門
一	一	一	和
二	二	二	書
三	三	三	門
四	四	四	
五	五	五	
六	六	六	
七	七	七	
八	八	八	
九	九	九	
十	十	十	
十一	十一	十一	
十二	十二	十二	
十三	十三	十三	
十四	十四	十四	
十五	十五	十五	
十六	十六	十六	
十七	十七	十七	
十八	十八	十八	
十九	十九	十九	
二十	二十	二十	
二十一	二十一	二十一	
二十二	二十二	二十二	
二十三	二十三	二十三	
二十四	二十四	二十四	
二十五	二十五	二十五	
二十六	二十六	二十六	
二十七	二十七	二十七	
二十八	二十八	二十八	
二十九	二十九	二十九	
三十	三十	三十	
三十一	三十一	三十一	
三十二	三十二	三十二	
三十三	三十三	三十三	
三十四	三十四	三十四	
三十五	三十五	三十五	
三十六	三十六	三十六	
三十七	三十七	三十七	
三十八	三十八	三十八	
三十九	三十九	三十九	
四十	四十	四十	
四十一	四十一	四十一	
四十二	四十二	四十二	
四十三	四十三	四十三	
四十四	四十四	四十四	
四十五	四十五	四十五	
四十六	四十六	四十六	
四十七	四十七	四十七	
四十八	四十八	四十八	
四十九	四十九	四十九	
五十	五十	五十	
五十一	五十一	五十一	
五十二	五十二	五十二	
五十三	五十三	五十三	
五十四	五十四	五十四	
五十五	五十五	五十五	
五十六	五十六	五十六	
五十七	五十七	五十七	
五十八	五十八	五十八	
五十九	五十九	五十九	
六十	六十	六十	
六十一	六十一	六十一	
六十二	六十二	六十二	
六十三	六十三	六十三	
六十四	六十四	六十四	
六十五	六十五	六十五	

內 閣 文 庫			和 書 類
一	一	一	和
二	二	二	書
三	三	三	類
四	四	四	
五	五	五	
六	六	六	
七	七	七	
八	八	八	
九	九	九	
十	十	十	
十一	十一	十一	
十二	十二	十二	
十三	十三	十三	
十四	十四	十四	
十五	十五	十五	
十六	十六	十六	
十七	十七	十七	
十八	十八	十八	
十九	十九	十九	
二十	二十	二十	
二十一	二十一	二十一	
二十二	二十二	二十二	
二十三	二十三	二十三	
二十四	二十四	二十四	
二十五	二十五	二十五	
二十六	二十六	二十六	
二十七	二十七	二十七	
二十八	二十八	二十八	
二十九	二十九	二十九	
三十	三十	三十	
三十一	三十一	三十一	
三十二	三十二	三十二	
三十三	三十三	三十三	
三十四	三十四	三十四	
三十五	三十五	三十五	
三十六	三十六	三十六	
三十七	三十七	三十七	
三十八	三十八	三十八	
三十九	三十九	三十九	
四十	四十	四十	
四十一	四十一	四十一	
四十二	四十二	四十二	
四十三	四十三	四十三	
四十四	四十四	四十四	
四十五	四十五	四十五	
四十六	四十六	四十六	
四十七	四十七	四十七	
四十八	四十八	四十八	
四十九	四十九	四十九	
五十	五十	五十	
五十一	五十一	五十一	
五十二	五十二	五十二	
五十三	五十三	五十三	
五十四	五十四	五十四	
五十五	五十五	五十五	
五十六	五十六	五十六	
五十七	五十七	五十七	
五十八	五十八	五十八	
五十九	五十九	五十九	
六十	六十	六十	
六十一	六十一	六十一	
六十二	六十二	六十二	
六十三	六十三	六十三	
六十四	六十四	六十四	
六十五	六十五	六十五	

內 閣 文 庫	
番 號	和 11497
冊 數	65 (56)
函 號	211 302





我國神社乃御正体と稱するハ銘ニ其社乃本

地乃御形と鑄之云他一足中世ハ其社乃

往るハ其神ノ故乃神谷ノ其社乃洞中其

在宮一其社ノ其社乃其社乃其社乃其社乃

其心得あり其社乃其社乃其社乃其社乃其社乃

席邦語と以て安置とて其社乃其社乃

五輪塔形 大 鉢 其社乃其社乃其社乃其社乃

宝螺 其社乃其社乃其社乃其社乃其社乃

丙一二七九〇號

五十六



未教蓮華 観音

此外銀玉の矢等種に形なり

是御石辨して佛像の如く皆佐古くは山部氏の御
神体なりと執すなりなり大治四年丁二月座今の
雅明の太和姫の世紀の真書より大和乃 神法、神代
乃 神宮とりのり西佐よりなりなり 或ハ香化のヨス
物とて神取とるなりなり其精明の徳とて云とて此
我園上よりなり此風はなりなりなりなりなりなりなり

之磨邪形乃説よしく侍りて我 太神宮よハ

原の後と崇りまねハ 皇太神より 西の鏡と皇

孫等に授けさせれりなりなり時これ御えりなりなり

吾とえまねりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

皇太神の由りなりなりなりなりなりなりなりなりなり

山部神帝ハの侍り別は神意とて

皇天神意の由体なりなりなりなりなりなりなりなりなり

赤酒還御の時尾張のさし酢媛の家より御し

八幡ハ應神天皇御田の足邊御夢ありしと申
山宗すふんより卯令に足よりくさハ言ふ谷のゆ
佐よるひ侍らんてこれと今よりまほ人作あり
く神靈と記ふされし古神に古御の妙体と
かゆと記儒教の流とまよふれとまよふ又何とん
てうま御神とゆくゆれん也蓋し傷よりしと陰陽
有則乃正と名神と一昔妙体ハ山宗てあれと察
向行よりしハ指すれを真宗上の理体より万代の

禱子別きり御妙用のゆかりありて御おろくはあり
天竺性なりと考ふる不此法を神名と其根本地と
なれし出纏真如乃無漏の理体とのうゆとあが
きうゆと唯教化問の候とまの唐土日本其國異
よ山川人物各月一休あ後以定体ゆるといふ
リ一世界乃國ありてまの日月地いふと考り此
教は佛教と考り人の生土れ競とりりてゆふの神
流と考りて可も度外れに候よりゆふれ事なり

臨名りりしきとけりしもの心と子をたしめ
られば藏院徳の法院徳院徳乃新徳の
こととて真日本神とて徳なり儒士の方
よ徳とのれさるる法徳新徳乃本地徳乃徳
乃徳徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
名徳とてまき徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
一徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃

り徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃

くことし徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃

神徳道乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
新徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃
徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃徳乃

うのまゝいしを

辻社にまはりしとよかしくは養嗣の類に海

道中のあはれも止社権ふとふれなきる凡信實

系心き神中乃本林にまはりてふしんり神公明

山城國葛野郡松尾神社

正一位名神
大社

三二社にあり

大山咋神市杵島姫神二座と祀れとて社傳

ハニ座の神別と初決ありと云こ又彼社記云當

社ハ者以為上古國造神為高基鎮守社ト云

山城國造ハ阿多記命なり也四事記より云

又月紀ハ山背國造河川曾能振命と父己按ふ

又阿多根命ハ神武帝の時の國造曾能振命

ハ成務帝ハ朝の造長りふ秋言内者所祭三

座の中國此神社の曾能振命なり

地神本記ハ大山咋神と松尾神りゆり記事又

梅下ハ明應八年十月此古文書に松尾ゆりりて

山城一宮と云云又當國一宮ハ加茂皇太神成

少時欣日益老至苦年侵紅顏脫四能艷白髮寧
久吟階庭唯仰杜朝府石勝碧本肥方院山鹿徒

有壯時心 廣弘明集四十一
老若詩

吟吟鏡庭とるぬ氣を叙しじとゆくく
向しれ、只いられて暗あの日夕は迫ふと
と侍所歡愛今何有悲啼亦空同為一夜
夢天過十年中と白居易の作し
文集 廿六 三三三のうはんしそーまらた

く向まあまハ之うねぬ暮仰わしソの田道の期
うーしととひひるぬとと情こまきん
有松の儀よれりくうれり歡樂のわんや
やん又碧紫忘大苦受大苦時忘業と淨心
誠觀よいつる教と一の希とゆきと
クハく向この本より 心地觀經 界ハ大宅
法華 されとく山くおんまきと
あ〜ゆり〜たのよきほ〜ま〜余りか〜

かゝるてふたふいふもよめやうり子結方也し
いし甲のししこゆるん何や海

或人のしとめしとる能くしとつらあひはりし
しよ

いけふんていふゆふのしとや能くしとる能く
しとる能く

知覚 知是知此事 覺覺此理 知

福り振色の際物 カキリ云カキト云 今つらんといふ
結のくちめなふとゆめさむりー僧衣多ハ福なり

草一拾集に

心とはほほゆいし 傍摩成り 福の云はるいふれも

いしとつら 橋長らうぬのるゆなりー 故に好なり

多しとるしー 此世のうらさの書と考一揚ハ陸佃

ははる 黄里をくといふなり 傍よりみせしらのす

とうぬい海田の故よりなるも也すてふれき者

文章にどのこそ 物おそれのしらみ真さるる人

此字に赤わ利とよみぬりーしとるしとるし

或方 硯 一閑 詩 一床 琴 或炬 燭 一襲 表裏右

一綱 羊一丸 一方 猶鹿の肉と呼ぶ多肉 四蹄 猪

或翼 鷄鴨等之 又或翅尾 或掌 或冠丸

此れ猶多し今 畧之れと物乃 盤は盛 神俗たいに

しゆとは 或籠とひひ 或又 貯し 貯とは 或高りと

子 或貯 貯多しとは 或貯し 子の類の名目 或は

し 或 貯多し 貯多し 貯多し 貯多し 貯多し

之 貯多し 貯多し

左右乃二字とま 葉にトカシト 読し 無凡んいさく

以てこのやまをいし 江文通より 書ふ 整定 停た右

々加 隣り 察し あり され 俗に あり あり あり

之を 通せり 兵刃と とも とも とも とも とも とも

れ ち ぬ る い へ へ

左右と 詩經 周易 文選 などの 四訓と オウリ

ハサト 読り 是 作 置し 甲 意 用 記

丁酉五月廿五日 減下にて 此 奉 け たる 三月

將軍家御代始乃由目と讀みし御りして御家人
よ兼り侍りしめさせり又和乃御代目の御りて
自書しこれ題と加へさせ侍りまらん

御夜居間年无西上御用人等入目附北上大

寄合北東其後御側物頭等北より白て 盃頭共

後此叙の面々其後諸物頭五州の門取也 安達玄長

ふとまうてせりし

文廟さりと御心とまはる色御りて叙仰出り

古今ハる古文書とどりし御りておのぬめ
れいん法のる御りておのぬめ
ゆりし御りておのぬめ

茨野知秋翁予り蜀夢を題せし御りて

らとゆりし御りておのぬめ

横卷不知残月傾 閑意添得入紅裳

芝園蘭徑聲凡裡 口舌火愧自俗情

とありし道し

活斬世態と述く一章

蓋替人世渡津舟 登岸東西玄石留

名姓空殘一碑在 青苔埋尽土銀頭

けあふは名あめは力にやめとりぬ若れしとて

りか世の難くはけしむる人のたつた被誦と如

しゆりくこり志と述

空江載月一虚舟 曉嶺雲輕白玄留

蒲白荇行青對老眼 是非更無到心頭

公侯以下倭俗門内玄園有りりこれ新家此創也

大藏一覽集 四に無縫塔様分明筆石透玄園

蹟遺末云

造像中造像四徳経觀佛之味経優填王経佛

右金棺敬福経等に見之なり 法華に初昼依佛

像と説て其の徳とて已 予先王所建の本云
明答に今もく等しゆ

浴像經乃香火一ゆの以

牛耳梅檀 紫檀 多摩羅香 松茸茶

白檀 鬱金 龍涎 沉香 麝香 丁香

此香得方所_レ隨て_レの_レ湯火_レ一_レ供_レ像_レ代
浴_レ身_レ一_レ之_レ多_レ湯_レ回

我今灌沐諸如來 淨智莊嚴功德衆

五濁衆生令離垢 願證如來淨法身

我因个此浴四月八日灌佛の外浴像の_レ一_レ由_レを_レ

と_レや

勿論 兼談ニ及びぬ 白氏文集勿復論云云源氏物

物語より子_レ姫と云言_レなり 此_レ勿論なり

情我因人_レに_レと_レし_レ海_レ已_レ修_レ信_レ着_レ新_レ艶_レ橋

言月と滯時網_レ詩_レあ_レ作_レを_レ情_レハ_レ雁_レと_レ月_レ字_レ以_レし

け_レと_レ子_レ意_レハ_レ外_レも_レや_レ就_レの_レ字_レや_レつ_レと_レ文

選_レの_レ古_レ訓_レよ_レし_レ心_レと_レた_レの_レそ_レり_レは_レり_レと_レ意_レ回

き_レ教_レ寂_レ乃_レ字_レと_レほ_レく_レと_レい_レせ_レら_レる_レ閑_レ坐_レ寂_レ無

語_レ白_レ氏_レ文集_レ乃_レ兼_レに_レつ_レと_レい_レふ_レと_レい_レふ_レと_レい_レふ

法_レ平_レ琴_レ楚_レ劍_レ乃_レ五_レ調_レ子_レ我_レ因_レ代_レ習_レて_レ樂_レ家_レ法

とんたれ随樂此法も所漢家此旧法なりて宮
商角徵羽乃五音也

清ハ双調 琴ハ黄鐘楚ハ一越 側ハ般涉
平の名乃と不易

唐十二施宮御用ハ八十四調と造れり 古法あり
に岩及塚一といふて代樂考榘く造る人なり

りりしとと我國随唐之韓乃ハ樂中法て今ハ多
くハ侍れ 朝廷南都天王寺之所乃 伶人能古法

ゆきんせり

信濃國一越後國一行路 糸魚川とヤ也と云所

ありとこにころりやと榘のサハ中りハ分衆多
りりし益乃ハ行客其時中なるあり 其能後乃
中乃と往還すハ旅人としてハ一と云 然れども

又云列者此庄の中其れ付ハ 蠶の多き地也
此すハ月リ 俗ハ芳好也ハ五月院多しハ一
祭りかくちハうに集りて今ハハハハハハハハ

一筆に記し終りしとてさきさきいぬむらさ
地すきしは信長此入は見えし引合半もすたぬ
くおしおふれ海飲つとまいりといひ
法の水口一法と信長あられしをと神はわれり
しりぬまはあらのふうくちてはれおとす
ゆきしは信長情難りし甲しうしりか意
するしぬ也

ゆいしるまに袖ぬれゆてしに様えさうすぬれぬ

東都榎の大宮八度長十一年丙午 尾紀及

水戸侯此御屋形ハ鞠町御門の内ト云 一三三

おゆりし一光如九年癸亥 台徳公被公此御帷

一御成此時殿門ノ新まはくまはしし

奉り山下 敬云の御まは鞠町一町目別工水館
信濃

と行遠向り 寛永十九年壬午 御後徒あり

一市買御門外乃御屋形ハうほし
一

世々皆まひし 此時荒六の
川筋とくつ

瑞龍公御誕生此後大王九の内 若宮へ御参り
宣永二年一七九月三日と或る古家より書留と
しと之のり

足利將軍義昭六條の本陣に在りし時
之如矢方おのり其堂前藤松水以下を以て
主君と稱せんといふれも幕下れ土名令御控
防陣よりは賊敗し退く是後越田長室町
の御下中言一と稱しはつとせらるる本國等は

此の年より此座のり一故感賞ありありうば
さや人のり一は彼等此防中を令く取却けり
て由衛殿一まつとせと云ふれ御座等ととこわたり
幕府迄おれ士女あり一日蓮堂天竺寺
お上言ふれり治もさやとん一り堂は松水原に
お波家方ありて任得と云ふも通一と念せて公
よりりたりと云ふと同一一其らお松水明等あり
昨日蓮堂のり一おのりく之のり一政の家内

檀那乃初禱としてとらへてすかりとある今日
一いしと大徳あのみて家れあつひのなす
彼の高妙人なりと我昔 葦一未だ ぬこり
豊長彦原加藤信俊等れいひるものとあし
業良秀吉朝鮮の及乃皆西國よりあつた
りて國あてんてめ位新と流せしめ
きふ月此夜ゆり 細川吉方代りて
安由こるれあも

のこり神代きりてゆりて度今延後新し時
息延昌き、少年りりし此初とありてせ
おとせぬしとてぬしとてぬしとてぬしとて
堂上あれんて感一あらぬし
し、後れりてぬしとてぬしとてぬしとて
いしとてぬしとてぬしとてぬしとてぬしとて
さしとてぬしとてぬしとてぬしとてぬしとて
し、いしとてぬしとてぬしとてぬしとてぬしとて

後... 古御

...

横田

...

えわ... 足高...

らせ... 一...

...

彼の... 油子

...

其他... 松橋...

言... 師連...

其... 法印...

...

未... 田舎...

花... 見...

わと此書に大いなる功ありしを以て
わと此書に大いなる功ありしを以て

東海國經洋菴師の著る此和歌の中いふ歌と
あまの由にまゝなりといふを以てそのまゝ
光彦郷のよみ名越後とて大慰念と對する其の
名と稱し今後まつてあるもよみ名なりと
これに於て西の國なりといふはよみ名なりと
にまゝといふは天照天神とすまゝ馬場とす

とすは一と一と此和歌に於て後絶りんも
とすは一と一と此和歌に於て後絶りんも
人の口碑ありしとすことなりとすは後の
にむすべしとすことなりとすは後の
にむすべしとすことなりとすは後の
にむすべしとすことなりとすは後の

此等皆我民此語作し仁徳記あり

わがことし或はわがことし
雑穢とすなりとすことなりとすは後の

おとこ日記... 氣の善なりと云ふ...
らん

六月九日 江戸時 東野小橋町之丁目欠尺物... 南葉

めく... 井口... 石京... 東野

守... 館... 東野

寺... 東野

橋... 東野

日の... 東野

或人... 眼... 東野

て... 東野

又... 東野

云... 東野

漸... 東野

ニ... 東野

く... 東野

時... 東野

其妻爲て歎て歎息して曰神人れ病とありて
乃命を請ふと一石餘の石を飲其石に何と云
しん吾寧死すとも此の石を殺すに忍んやと
て筆を削りて放り又取りて是れ神の書と云
むあめく悔むと云ふこゝろにて重病日と云ん
しして差あつたゆゑに其病は年忽好て男子
と生れ四臂の形と云ふれ思徳有りて
名感應編圖説之云なり嗚呼物は飛走能

人れ以動のとも一其機執人れは位下と云ふ
と此第穴ハ人の宮室乃と云く物乃胎卵の人此
孕之月と云ふ一也如飛と網歎一是は返捉
して生と云ふ一也觀や祭一梅と終一過
してと得る一も穴を填ふと覆一して是は云
ら一の胎と云ふり而と破りて血液を流し
殺れぬく穢と云は折深き患の殘害は
て口腹の欲と云ふ一或は病れ爲る物と殺

し主なるもや遠ぶ或は病はあめく教して生めん
しと斗は顔足不仁不業此地より何りもや子國君
ハ其國は降く其國入史の群や不持去其群卵
と其取者れよとより且昆虫お驚時火田と取
卵よとく此業は西渡は宗廟の儀性あり北
月とれとハ孫虫胎天飛る計類ハと其取者正
しと記め成して聖人物の業にいと何れもす
り政よ其止しと得よとて持て取ハつハ田穀

の害と除きつは武成清一兵と治る國事なり
て私乃遊息なりとよりは向の命は其取也
其世人妄言を教と好ハ曹公の衆人なりと其ハ
もしや私教乃つとつハの好もとや教業を言ハ
故小走危程年成掩し鈴と此四は正ハ其も人
あらんつと史つと其も也
法實人法師 道か 書紳云害善之禁は偏直遠
之損恩之道益其用之口無自伐心無自欺句

抱内意勿揚并儀欲人之譽言已之松殺義之
 始陷禍之基自恃其德必有餘淺自矜其達必有
 餘非之頻驚光影堅勿消時芭蕉虛傳非
 世久欺蓮華淨土是世真故云 天竺別集
 又彼師乃金剛集中 施食文小惟願面玉鬼王
 大穢暗土慈喜重人曾撰并量并也垣何行餓
 鬼之元是木伐所及尔而施并遮并穢法淨
 法食云

那解好也の語と流して人は佛んとまきしむれば必
 他乃善心と換し 田徳は乃其罪之れより大り分
 いらし 鬼而南あ口業とさきふれあつあつ
 勿口祿の重きあこもあまふくねを或師乃る
 しめれしもさつとまき物しむるは
 そんらぬれし人れきに違ひし恨めらるに
 言乃業そらりやまねと申し 世にさくや
 あまへく期あはれもあはれく世にさくや

世は名俗時勢ゆりんとく一歌一智一巻一冊一字
一語種々所出過々此所為一師

日月群の起りて一時は隱す。ゆりゆれと時
尚と云 竹意之筆 好事ゆりゆれと何しと

乃こゆとゆきしるるゆりゆれと世に也ゆりゆれ

一ゆりゆれと世に也ゆりゆれと世に也ゆりゆれ

己一筆新ゆれ戯場ゆりゆれゆりゆれ國姓翁翁

成田と云ふ馬席年氏と賜りてと云ふ
一師と云ふ己故ゆり世國姓翁と祐せ 幸初ゆりゆれ

一ゆりゆれと世に也ゆりゆれと世に也ゆりゆれ

きとゆりゆれ一筆又て一厭りゆりゆれと世に也

中ゆりゆれ一筆又て一厭りゆりゆれと世に也

花ゆりゆれと世に也ゆりゆれと世に也ゆりゆれ

とゆりゆれと世に也ゆりゆれと世に也ゆりゆれ

ゆりゆれと世に也ゆりゆれと世に也ゆりゆれ

ゆりゆれと世に也ゆりゆれと世に也ゆりゆれ

ゆりゆれと世に也ゆりゆれと世に也ゆりゆれ

朝廷今日浦界二品より堂上之也

堂上補畧

内府 前 内御 前 内官 前

儀同三司一位 大納言十人 前

十納言十人 前 参議八人 前

非参議 官卑し二三位に昇りしもの式ハ前官 當的此く多し

是位と公卿也

藏人頭 正四位上十始ハ并官 中少將侍従ホケ中 藏人 正五位上ノ初 中 諸官多

六位藏人昇殿と禮

是より内殿上人も通は但一六位ハ別はれ

他下補畧 正四位下

外記方 大外記 少外記 兼 史生

文殿 史生四人比内 白侯 陳宮人 内監 兼 主 兼 主

兵庫寮 系伏 主代 教師 鉦師 忌部 御倉出倉人 中兼之

左馬寮 右馬寮 左右馬寮出倉人 八人

掃部寮 造 廼司 大舍人 替者 快部

右と外記方此官人と祐人

官務方 左大夫 右大夫 左右少大夫 五官掌

右官掌 召使 主殿寮 生人官人 大炬師

松持門部 一人八伴方 一人八佐方 内舍人 大藏省年頭

木工寮年頭 近衛府生年頭 大藏省史生

左近府鼓師 日証師 使部 衛士

御香火官人 旛鉦官人 日鉦方 四府見部

右近衛府少法人 左近衛府少法人 駕輿十八人 見部少法人

藏人

出納 内藏寮年頭 近衛廳頭 内藏寮官人

同史生 右近府鼓師 同証師 御倉少舍人

行書所 戸屋主

内膳司 大膳職 圖書寮 主水司 修理職

上南座 下南座 全殿人

院兼仕 御經藏經師 大律師 珍所

鑑取 大工 大釘 御事銅舍人 御車大工

外記方官務方兩局及八藏人方催の判官人

典藥寮 針博士 陰陽寮

御府子所願 供御所願 上御藏

下御藏 御壹占次長

院廳 同雜色

大經師 陰經師

檢非違侍方

判官 省督長 使廳 大長 調度縣

御隨身 侍人

非藏人 上北面 院藏人 北藏人

下北面

此外院諸大夫親王家殿上人 諸大夫 皇宗法華

家此五位六位等牧奉に違ゆゝとわとほく身平

のせむはくゝ猶 九重に官家ゆゝもく地

せむあはくまふも

堂上の諸家、五根家小房、たまたみ、いれ、中、流、元

七福八

近衛殿家礼二十七家

四辻

持明院

德野井

難波

山科

拂司

柳原

廣橋

高倉

平松

石井

長谷

交野

高野

裏辻

西園院

日野西

富小路

裏松

竹屋

竹内

船橋

吉田

萩野

上井

土御門

櫻井

九條殿家礼十家

凌小路

鷲尾

油小路

湍河

葉室

万里小路

押小路

五辻

屠橋

伏原

二條殿家礼三家

中御門

白河

四條

一條殿家礼九家

中山

野宮

橋本

東露寺

法雨寺

東切成

五條

高辻

藤波

鷹司殿家孔十家

正親町 冷泉 下冷泉 梅溪 阿野

藤谷 川籍 堤 町尻 入江

清華家八家並の名目 天正此諸大名しつと
方家の家並にして

尾紀水戸の各別と
清華比川故り云と

享保三年丁酉五月十一日對集侍從義方朝臣

御中 御石一朝鮮國王隣好之聘使奉ル

言此林中未朝令むし御年九といふ仰と

出され

後高橋御政

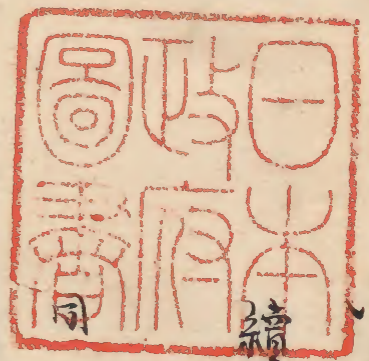
幸福や山初る御仲小西信房より此取水の足風を御

けしこと或上人水想觀の説法ありき一といふ

くまひとれ也

藏蓮西行定家ニ文れこの外勢ふつ乃

かかあれの夕々なふとそ山房の百芳也



續後撰

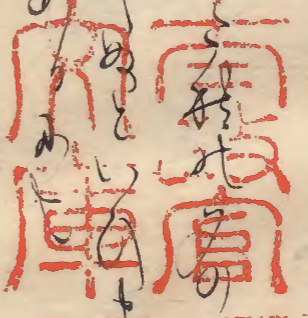
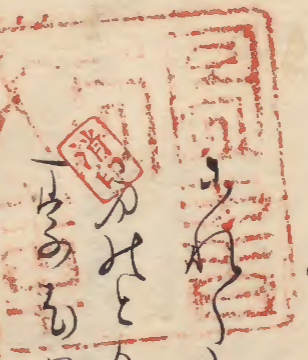
海部少輔... 藤原... 藤原... 藤原...

藤原... 藤原...

藤原...

拾遺... 藤原... 藤原... 藤原...

藤原... 藤原... 藤原... 藤原...



藤原... 藤原... 藤原... 藤原...

初... 藤原...

